

赤貧の晩年 赤痢菌の発見者

志賀 潔

赤痢という病気は、発熱と下痢をきたす消化管感染症で、その赤痢菌を発見したのが志賀潔（1870～1957年）である。

志賀は1896（明治29）年に東京帝国大学医科大学を卒業し、北里柴三郎（1853～1931年）が所長を務める大日本私立衛生会伝染病研究所に入所し、北里の弟子となっている。伝染病研究所に入所した翌年、1897（明治30）年12月25日発行の細菌学雑誌25号に、赤痢菌発見論文「赤痢病原研究報告第一」を発表した。翌年1898（明治31）年、志賀は「Über den Erreger der Dysenterie in Japan」と題して、赤痢菌発見の要約論文をドイツ語で発表した。赤痢菌の属名「Shigella」は、志賀の功績として細菌学史に永遠に残り、病原細菌の学名に日本人の名前が冠せられているのは、唯一の例とのことである¹⁾。

1901（明治34）年にドイツのフランクフルトに留学し、パウル・エールリッヒ（1854～1915年）に師事して細菌学の研究に磨きをかけた。やがて伝染病研究所が内務省から文部省に移管し、東大の下部組織に組み込まれるという事件が起こる。反発した所長の北里が席を蹴って退職、北里研究所を創設した。この動きを聞いて帰国した志賀は、北里を追って北里研究所に移り、新たな研究生活を始める。

志賀は北里が慶応義塾大学に医学部を創設すると、1920（大正9）年、細菌学教授に迎えられた。しかし同年秋には朝鮮総督府医学院長・京城医学専門学校長に転ずることになり、朝鮮に向かう。1926（大正15）年には京城帝国大学（現在のソウル大学）が創設され、医学部長に就任、更に3年後には同大学の総長に就任する。だがここで、思わぬ事態が待っていた²⁾。

総長に就任した志賀は、「ライの歴史とライ病の研究」と題して記念講演を行ったが、その内容をめぐって一部の教授たちから非難され、任期を待たずに辞任することになった。

当時ライ（ハンセン病）は不治の伝染病と忌み嫌われていたが、志賀は細菌学の立場からライ菌は弱い細菌であることを話し、「栄養改善や衛生の配慮で防止できる」と力説したのである。これに対し光田健輔（1876～1964年）等の療養所派と言われる人達は、ライ（ハンセン病）は非常に危険な急性伝染病として絶



写真1 志賀潔胸像(仙台市勾当台公園)



写真2 志賀潔頌徳碑(山元町磯崎山公園)

対隔離を主張し、1931（昭和6）年に癩（ライ）予防法が成立した³⁾。

写真家の土門拳が捉えた引退後の志賀の写真は、世界的に有名な細菌学者とは思えぬほど零落した姿である。「障子一面に新聞紙が貼ってあった。つまり、障子紙の代わりに新聞紙を使ってあるのだった。だから部屋は重苦しく暗かった。…（中略）…赤貧洗うが如き生活に、余生を細らせているのである。」という一文を読んで⁴⁾、1931（昭和6）年に京城帝国大学を追われてからの晩年の不遇を思わずにはいられない。

仙台市街の勾当台公園に顕彰碑と胸像（写真1）が、晩年に移り住んだ宮城県亶理郡山元町の磯崎山公園には「自ら信ずる所篤ければ、成果自ら到る」と刻まれた頌徳碑（写真2）がある。また、仙台市北山の輪王寺の一面には志賀潔の墓がひっそりと立っている⁵⁾。

参考資料

- 1) 竹田美文, 志賀潔—赤痢菌の発見—, モダンメディア, 60巻, 5号, 12～15 (2014)
- 2) 鈴木 昶, 志賀潔 赤痢菌の発見者, 日本医家列伝, 大修館書店, 337～340 (2013)
- 3) 滝尾英二, 小鹿島ハンセン病補償請求が問うもの, 世界, no.725, 岩波書店 (2004)
- 4) 土門 拳, 土門拳全集9, 風貌, 5, 小学館 (1984)
- 5) 諸澄邦彦, 赤痢と志賀潔, 医療史蹟探訪, 医療科学社, 129～131 (2016)

(日本診療放射線技師会 諸澄邦彦)